

講演「アルベール・カミュのアルジェリア、そして日本」引用集

2021年10月29日 茨木博史

【1】

母もまた静かだった。ときおり誰かが「何を考えているの？」と尋ねても、彼女は「何も」と答えた。それは本当だった。全てがそこにあり、そして何もなかった。彼女の人生、興味、子どもたち、全てがそこにあり、ごく自然にそれが感じられた。彼女は身体が不自由で、あまり物を考えることができなかった。[...] 彼女の周りを夜が厚く取り囲み、その中で彼女の沈黙は癒しがたい悲しみとなった。そんなときに家に戻ると、息子は母の骨ばったか細い肩を見た。彼は立ち止まり、恐れる。様々な感情がわき上がってくる。自分の存在を忘れそうになってしまう。その動物的な沈黙を前に、彼は泣くこともできない。彼は母を哀れに思う。それは彼女を愛しているということだろうか。彼女は決して子どもを愛撫しない。やり方を知らないからだ。息子は長い間彼女を見つめた。まるで自分をよそ者のように感じながら、彼は自分の痛みを感じる。母は息子の話を聞かない。耳が聞こえないからだ。

ーカミュ『裏と表』(1939年)

【2】

芸術家はそれぞれ、彼の奥底に自分だけの泉を持っており、それが彼の生涯を通じて彼自身と彼の語ることに養分を与えるのだ。この泉が枯れるとき、彼の作品も徐々に干からび、ひび割れていくのだ。…私にとっては、『裏と表』の中に、私が長い間生き、その思い出が、私を怨恨と自己満足というすべての芸術家が陥る二つの危険から私を守ってくれた。貧困と光の世界の中に自分の泉があることを私は知っている。

ーカミュ『裏と表』(1958年に再刊した際の序文)

【3】

パリでは人は、空間や羽ばたくことへのノスタルジーを抱くかもしれない。ここ(アルジェ)では、少なくとも、人は満ち足りており、自らの欲望を確認し、そして、自らの豊かさを測ることができる。[...] 学び、自らを教育し、より善くなりたいと望むような者にとっては、ここには何もない。この国には教訓がない。

[...]

彼らはこのとおり過去も伝統も持たない人々だが、詩情がないわけではない。といっても、その詩情は堅く、肉体的で、優しさとはほど遠く、彼らの空のようで、それでいて私の心を揺さぶるかき立てる、唯一のものなのだ。

ーカミュ「アルジェの夏」『結婚』(1939年)

)

【4】

戦争が起るだろうという噂だった。きっと起るだろう。家庭では誰もがそう確信するようになった。皆がそのことについて話し合うようになった。強大な力を持った一人の男が戦争を起こすらしい、と人びとは噂した。[…] ヒトラー万歳！ […]

ヒトラーとかいう名前の男は誰もかなわないほど強いらしい。彼は世界征服に乗り出したらしい。彼は王様になるつもりだ。しかもこのとても強い男はムスリムの味方だそう。彼がこの国にやって来れば、ムスリムは望む物をすべて与えられて、幸せになれるそう。彼はユダヤ人どもが嫌いで、殺して、財産を奪うそう。彼はイスラムの保護者で、フランス人どもを追い払ってくれるらしい。[…] アラーのほかには神はなく、ムハンマドはその預言者なり！

ーモハメド・ディブ『大きな家』（1952年）

（戦争（第二次世界大戦）が始まるという噂を聞いた、トレムセンの街の人々の様子）

【5】

[…] 我々の呼びかけを正当化する希望の共同体というものがあります。この共同体は全く否定しようのない現実の上にあるのです。この土地には1世紀前から定住している100万人のヨーロッパ人、何世紀も前から生きているアラブ人とベルベル人のムスリムたちが、いくつもの宗教共同体が、強く生きているのです。これらの人々は、歴史が彼らを連れてきたこの諸民族が行きかうこの十字路の上で、共に生きなければならないのです。彼らにはそれができるのです、お互いが一歩ずつ前に進み、自由に向き合うことさえできたなら。

ーカミュ「アルジェリア市民停戦の呼びかけ」（1956年）

【6】

ドイツ人たちはまたフランスに戦争を強いた。そして苦しみが始まろうとしていた。ーそれには理由がなく、彼女（ジャックの母）は、フランスの歴史も、歴史とは何かも知らなかった。彼女は自身のそれについては多少知っていたが、それもかろうじて彼女が愛した者たちについてのものことであって、彼女が愛した者たちは、彼女と同様苦しまなければならない人々であった。

ーカミュ『最初の人間』（未完の遺作、1994年刊行）

【7】

ディディエを通じて、ジャックはフランスの平均的な家庭というものを理解した。彼はフランスにヴァカンスのたびに帰る家があり、ジャックにいつもその家のことを話したり、手紙に書いたりした。家には古いトランクがいくつもあって、中には家族の手紙やお土

産、写真などがしまわれているとのことだった。彼は祖父母や曾祖父母の歴史も知っており、トラファルガーの戦いを水兵として戦った先祖までいた。その長い家族の歴史は彼の想像の中で生きており、彼の日々の行動に模範と教訓を与えていた。[…] 彼がフランスについて話すとき、彼は「我々の祖国」と言い、その祖国が求める犠牲をあらかじめ受け入れていた（「君の父上は祖国のために亡くなったのだ」と彼はジャックに言った…）。一方、ジャックの方にとって祖国という概念は意味を持たない空虚なものであった。彼は自分がフランス人であり、それによっていくらかの義務が伴うことは知っていたが、彼にとってフランスとは人々が引き合いに出し、ときどき彼の家の外で人々が話している神とやらと同じく善いことや悪いことを分配する者で、人間は何ら影響を与えることはできないが反対に向こうは人の運命をどうにでもできる、そんなぼんやりとした存在のことだった。このような感覚は、ジャックと一緒に生活する女性たちにとってはもっとそうであった。「母さん、祖国って何？」とある日彼は尋ねた。母は彼女が理解しないことを前にしたときにいつもそうであるように、怯えた表情をして「知らないわ。知らない」と言った。「フランスのことだよ」「ああ！そうね」。彼女は安心したようだった。

—カミュ『最初の人間』（未完の遺作、1994年刊行）

【8】

彼はこの匿名性から、貧しい生活から、抜き去ることのできない無知から逃れようと試みた。彼は言葉もなく、すぐ先のこと以外には展望もない、このような盲目的な忍耐にとどまって生きることができなかった。

—カミュ『最初の人間』（未完の遺作、1994年刊行）

【9】

私はここに同じ血とあらゆる相違で結ばれた一組の男女の物語を書きたいと思う。彼女はその土地がもたらす最も良いものに似ており、一方、彼の方は静かに怪物的である。彼は我々の歴史のあらゆる狂気の中に身を投じた。彼女はそれがすべて時代の歴史であるかのように、同じ歴史を横切った。彼女はほとんどの時代を沈黙のうちに過ごし、自分の気持ちを表すためにかろうじてわずかな言葉を発する。彼は絶えず話しつづけ、そして多くの言葉を費やした挙句に、彼女がたった一つの沈黙によって表現することができたものを見出すこともできなかった。…母と息子

—カミュ「ノートとプラン」『最初の人間』（未完の遺作、1994年刊行）

【10】

その大地を返せ。そのすべての大地を貧しい者たちに、何も持たず、手に入れたり、所有したりすることを望んだこともないほど貧しい者たちに、この国で彼女のような者たちに、夥しい数の惨めな者たち、大部分のアラブ人、そして幾ばかりかのフランス人、執着

と忍耐によってここで生き、生き残る人々に、…

(そのとき偉大な匿名性は実り豊かなものとなり、私をも再び包む—私はこの国に戻るだろう)

—カミュ「ノートとプラン」『最初の人間』(未完の遺作、1994年刊行)

【11】—1

事実はこうだ。(フランスとアルジェリアの)「結婚」などなかった。一度も。フランス人はずっと距離を置いていた。傲慢に距離を置いていた。フランス人たちは外国人のままだった。彼らはアルジェリアを自分たちのものだと思っている。[...] 我々はフランス人に言うだろう:「いいえ、みなさん。アルジェリアは私たちです。あなた方は我々の土地で外国人でした」と(1955年11-12月)

【11】—2

私はフランス人だと言うとき、私はすべてのフランス人が拒絶する名札を付けることになる。私はフランス語を話すし、フランスの学校を出たというのに。私は普通のフランス人と同じぐらいそれらを知っているのに。いったい私は何者なのか? あんなにたくさん名札があるというのに、私のものはないというのか? 私の名札はどれだ? 誰か教えてくれないか! (1956年2月)

—ムールード・フェラウン『日記』(1962年)